

# とんび凧 だこ

一

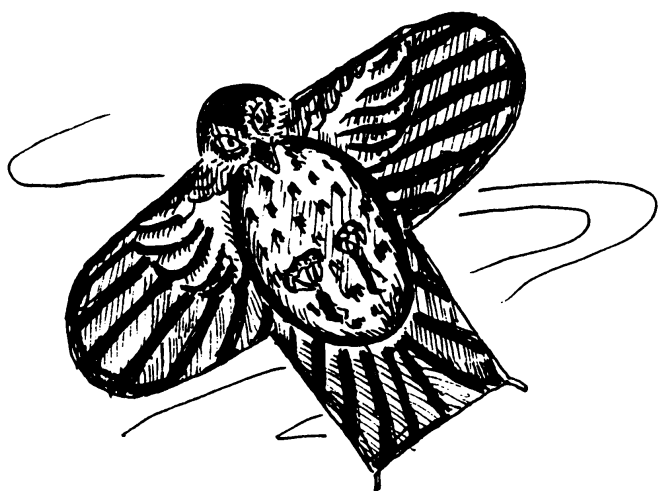
「和雄ちゃん。」と家の中からお母さんがよびます。

「もう暗くなったから中へお入り。」

「今すぐ……」

小さな和雄はしもやけで丸くはれた両手を羽織の脇明へ入れ、家の前に立ってくれていく日和山を見上げていました。

家の前の道は、半町ほど先の石橋を過ぎたところからへびのようにうねうねと曲がって山のとっつきまで上っています。そここのところに葉っぱのない木立がならんでいて、



脇明：服のわきの下のぬわわれているところ

町：約一〇九メートル

その間から月窓寺の本堂のわら屋根がのぞいています。今にも木立のかげから兄さんのすがたが見えるだろうと、和雄はさつきから息をつめて見上げているのでした。

兄さんの永二えいじは今日学校から帰ると、山の向こうの町の親類の家へお歳暮せいぼを持って出かけました。前からほしいほしいと言いつついた小さな地球儀ぎと、和雄のとんびだこを帰りに町で買って来ると言いつつ、一円もらっていったのです。もうとつくに帰ってもいいころなのにまだもどりません。やはりお母さんの言うように、明日は日曜だからと親類の家ですすめられて、とまることにしたのでしょうか。

「さあ、和雄ちゃん、もうご飯ですよ。」

「今すぐ……」

からすが二羽、鳴きもせずに山の方へ飛んでいって、やがてむらさき色の空へとけこんでしまいました。ふと山の上にぽつりと黒い点がうかびました。

「あ、兄ちゃんかしら？」

もう山にはもやがかかったので、兄ちゃんなのか犬ころなのか、そのけじめがつきません。そのうちにぼつとりした点は、いつの間にかどこかへ消えてしまいました。やはり犬かうさぎだったのでしよう。

「どうしたの、和雄ちゃん。もう兄ちゃんは帰りやしませんよ。」

とうとうお母さんは門口かどぐちまで出てきました。

「さ、ご飯にしましょうね。」

和雄もとうとう兄ちゃんは来ないものと決めて、お母さんと家へ入りました。

## 二

「おや、永二、どうしたの？あっちへとまることだと思ってたら。和雄ちゃんはもうねちやってるのよ。」

お母さんは玄関げんかんにしよんぼりつつ立っている永二を見てびっくりしました。

「早くお上がり。地球儀ぎは買えたの？」

---

「ううん。」と永二は首をふって上へ上がりました。

「なかったの？じゃあ凧は？」

すると永二は、ふいにシュンシュンとすすり泣きをはじめました。

「どうしたのさ。泣いてちや分らないじゃないの。」

永二はポケットから一本の万年筆を取り出すと、泣き泣き話し出しました。帰りに地

球儀ぎを買おうと文房具屋ぶんぼうぐやの前まで来ますと、シヨーウインドにかざってある九十五銭せんと

正札しょうふだのついた万年筆ひっが目につきました。すると今日まで夢ゆめにまで見ていた地球儀ぎより

も、その万年筆ひっの方がずっとほしくなつて、とうとうそれを買ってしまいました。しか

し帰り道で和雄ちゃんのとんび凧だこも買わずにもどるのに気がとがめてきました。万年筆ひっ

を返して、やつぱり地球儀ぎと凧だことを買おうかしらと考えながらのろのろ歩いているうち

にいつか月窓寺げっそうじまで来てしまいました。

月窓寺げっそうじの門の石だんにこしかけて、えさをあさっているはとを見ながら長い間ためら

銭：お金の単位。  
一。一円の一〇〇分の

っていましたが、やっぱり凧たこを持って帰らなくちや和雄ちゃんがかわいそうだと、また町へおりかえました。ところがとちゅうで日がくれ出して、心細くなった上に寒いし、おなかはずくし、その上、また万年筆ひっを返すのがおしくもなってきた、とうとう足をかえして帰って来たのでした。

「いいいいの、泣かなくっても。」とお母さんはなだめました。

「そんなに万年筆ひっがほしかったのなら、そりや買ったのもいいけど、五銭のおつりたこで凧たこが買えないのなら、せめて色紙でも買ってきてやればいいのに。今になって、こんなことを言ったところで仕方のない話だけど……それよりご飯お上がり。」

永二はご飯を食べ終わるとねまきに着かえてそつと和雄といっしょのふとんへ入りました。と、和雄がひよいと目を開きました。

「あ、兄ちゃん、凧たこは？」

「あのね……」と永二はうろたえて出まかせにこう言いました。

「<sup>たこ</sup>凧を売っているおもちゃ屋が火事で焼けちゃったんだよ。」

「いやあん。」

「今に建ったら買ってきてやるからね。」

和雄はつまらなそうにこっくりして、しばらく目を開いていましたが、じきにまたねむってしまった。

### 三

よく朝永二が目をさますと、となりのふとんにねているお母さんももう目を開いていました。和雄はまだねむっています。

「永ちゃん、目がさめたの。あのね、お母さん昨夜考えたんだけど、きょうは日曜でしょう、だからもう一ぺん町へ行って和雄ちゃんにとんび<sup>だこ</sup>凧買ってきてやってよ。」

「うん、行くよ。」

その声に和雄が目をさましました。

---

「兄ちゃん、たこ 凧は？」と昨夜のことはわすれているとみえて、いきなりこう聞きました。永二が返事にこまっていますとお母さんが引きとって、

「あのね、昨夜兄ちゃんがおそくなつて、たこ 凧が買えなかつたんだって。だから今朝ご飯を食べたら、すぐ買いに行ってくれるの。ね、いいでしょう。」

「うん。」

「母さん、ぼくね、」と永二が言いました。

「あの万年筆返して来ちゃおう。やっぱり地球儀ぎの方がいいや。そのおつりでたこ 凧買うよ。」

「いいのよ、そんなにしなくても。」とお母さんはやさしく言いました。

「たこ 凧のおあし 銭は別に上げるから、万年筆ひっがほしいのなら、そのまま持つておいで。」

「だってぼく、地球儀ぎの方がいいんだもの。」

「ふふ、おかしな子。」

#### 四

「和雄ちゃん、さよなら。」

永二は石橋の上でふりかえって手を上げました。

「兄ちゃん、さよなら。」

家の前に立っている和雄も両手を上げてさけびました。兄ちゃんは日和山へ上り出しました。静かな冬晴れのお天気です。どこかで山やまばとが「クククク」と鳴いていました。

山の上には白いけむりが一すじ立ち上っています。月窓寺の小僧げっそうじさんが落葉こぞうでも燃しているのでしょうか。

ふと和雄は、昨夜この山道を赤い消防自動車ぼうがけたたましくサイレンを鳴らして走っていく夢ゆめを見たのを思い出しました。だれかが町のおもちや屋が火事だとなつている声も聞きおもちや屋のウインドの中でとんびたこ凧やお馬やキューピーさんなどが、じゅうじゅう燃もえているところも見ました。どうしてあんな夢ゆめを見たのかわけが分かりません。永二のすがたはもう小さくなりました。こつちをふりかえって何かどなつているようで



すが、声は聞こえませんが。

「さよなら。」と和雄も力いっぱいさけんだその声も、もう兄ちゃんどこまでとはどかないでしょう。

「和雄ちゃん、もうお家へお入り。寒いから入ってらっしゃい。」とお母さんが中から言います。

「おこたができたわよ。」

「今すぐ……」

